

介護福祉実習における実習指導者と 養成校教員の連携のとらえ方

—インタビューの語りの分析—

伊 藤 優 子

▶キーワード

介護実習、連携
実習指導者、養成校
実習プログラム

▼要 旨

介護福祉士養成課程における介護実習（以下実習とする）は、学生が学内の講義や演習で学んだ理論と技術を実践の場において統合させ、利用者やその家族との関わりや専門職の他職種協働の場に参画することで、専門職としての価値を築いていく重要な場である。実習に関しては、実習施設と養成校の連携の必要性について、これまでも多くの研究で指摘されてきた。しかし、先行研究において実習指導者側が連携は図れていると認識しているのに対し、養成校教員では多くが図れていないと認識していることが示されている¹。

そこで、本研究においては、実習施設と養成校の認識のずれはどこから来るのか、両者の実習における連携の捉え方について明らかにすることを目的とした。その結果、「実習指導者は実習中に問題があれば連絡出来る関係を連携と捉えているが、教員は連絡と連携は違うと認識していること」、「情報の共有については学生の個人情報について、先入観からくる偏見などを考えてどこまで伝えるべきか教員が慎重になっていること」などが示された。

I. はじめに

1 研究の背景

平成21年、わが国の高齢化率は22.7%と超高齢化にあり、今後も増加を続けることが予測されている。それに伴い、高齢者に対する介護保険サービスの需要も拡大しており、社会福祉に従事する者の確保については、国民的課題となっている。平成19年に告示された「福祉人材確保の指針²」において、厚生労働省は、人材育成としての実習では、将来を担う人材を育てていくことが、福祉・介護サービスや経営者の社会的評価につながるとし、福祉・介護サービス就業を目指す学生を積極的に受け入れることが必要であると示している。介護福祉士養成教育においては、平成20年にカリキュラムの改正が行われ、実習受け入れ施設には、実習指導マニュアルの整備や実習指導者に対して、実習施設指導者特別研修の受講を終了していることなど一定の要件が課せられた。しかしながら、実習の状況を見ると実習施設の受け入れ体制は多様であり、実習の内容も実習施設に委ねられている部分が多い。津田（2008）の調査結果によると、9割の教員が施設実習において教育的な面での差が大きいと回答しており³、実習環境の違いは教育的な面での差につながることが示されている。

2 研究の目的

介護福祉士養成課程における実習は、学内の講義や演習で学んだ理論と技術を実践の場で統合させることが目的である。学生が実践の場において、利用者やその家族との関わりや専門職の多職種協働の場面に参画することで、これまでの学びをさらに発展させ、専門職者としての価値を築いていくことが目標であり、介護福祉士養成課程において重要な位置づけとなる。

実習の効果は、実習に至るまでの学内での事前学習や事後学習が重要であることは言うまでもないが、実習指導施設側の指導体制や学生に対する意識が実習に大きく影響することも指摘されている⁴。宇野ら（2006）は、実習において学生の意欲をそこなわせる要因として「人間関係」をあげ、そのなかでも、最も影響を与えているのが「介護職員の言動」であると述べている⁵。山下・尾台（2005）も、学生が感じている実習のやりにくさの要因として、職員の忙しさ、実習に対する無関心、指導者の不在などをあげている。一方、実習施設からは、通常の業務に加えての実習指導に対する負担感や学生指導の困難さが示されている。これらを改善するための課題として、実習における、実習施設と養成校の連携の必要性が多く の 先行研究で指摘されている^{6,7,8}。

しかし、先行研究においては、連携の在り方の具体策までは明らかにされていない。そこで、筆者らは「介護実習における実習施設と養成校の連携とそのあり方」を明らかにするため、平成20年に実習施設の指導者（以下 実習指導者とする）と養成校の教員（以下 教員とする）を対象に調査を行った⁹。その結果、約7割の実習施設の指導者が養成校との連携は図れていると回答していたのに対し、教員は、「連携は図れていない」「実習施設によって相違がある」と、回答しており、連携は図れていないと認識していることが示された¹⁰。実習指導者と教員の連携

に関する認識になぜこのようなずれが生じているのか、両者の連携の捉え方を明らかにするため、インタビュー調査のデータの中から、連携に関する語りに焦点を当て、分析を行うこととした。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査方法及び調査期間

実習施設の指導者と介護福祉士養成校の教員を対象とした。実習指導者は、「介護実習における養成校と施設との連携とそのあり方」のアンケート調査¹⁾において、インタビューに協力可能であると回答した者のうち、日程調整が可能であった15名を対象とした。教員は、縁故法により抽出した実習指導及び実習巡回を担当する15名の教員である。本調査は、2008年12月から2009年3月に行った。

調査はインタビュー協力者（以下協力者とする）に対して事前に概要を伝え、協力者が指定する場所へ調査者が訪問し、半構造化インタビューを行った。調査内容は、実習施設・養成校ともに、①基本属性、②所属施設または養成校の概要、③実習巡回に関すること、④中間・最終カンファレンスに関すること、⑤実習打ち合わせ会・報告会について、⑥カリキュラム改正について、⑦実習施設と養成校の連携についての7項目を軸に、それぞれの内容に応じた項目を設定した。インタビューの内容は、協力者に同意を得て、ICレコーダーに録音したのち、文章化を行った。協力者の属性は表1・表2のとおりである。

表1 実習指導者の属性

	性別	施設種別	実習登録者か	役職・職種
1	男	特養	非登録者	統括部長
2	男	特養	登録者	ケアワーカー
3	女	特養	非登録者	生活相談員
4	男	特養	登録者	生活相談員
5	女	老健	登録者	看護師長
6	男	特養	非登録者	施設長
7	女	老健	非登録者	看護師
8	女	老健	非登録者	看護師長
9	男	特養	登録者	生活相談員
10	男	特養	登録者	生活相談員
11	男	特養	非登録者	施設長
12	男	特養	登録者	副施設長
13	男	老健	登録者	フロアリーダー
14	男	特養	登録者	生活相談員
15	女	特養	登録者	ケアマネジャー

表2 養成校教員 回答者の属性

	性別	養成校種別	教員歴	元資格	現場経験	現場経験種別
1	女	短期大学	5	介護福祉士	あり	特養
2	女	専攻科	8	介護福祉士	あり	特養
3	女	専門学校	2	介護福祉士	あり	高齢施設
4	女	大学	18	その他	あり	居宅介護
5	男	専門学校	9	介護福祉士	あり	老健
6	男	専門学校	13	その他	なし	
7	男	専門学校	6	介護福祉士	あり	
8	女	短期大学	4	介護福祉士	あり	特養
9	女	専門学校	8	介護福祉士	あり	居宅介護
10	女	大学	13	看護師	あり	病院
11	女	専門学校	6	介護福祉士	あり	特養・ヘルパー
12	女	短期大学	4	介護福祉士	あり	特養
13	女	大学	6	介護福祉士	あり	障害者施設
14	女	短期大学	3	介護福祉士	あり	居宅介護
15	女	短期大学	2	介護福祉士	あり	高齢者・障害者施設

2. 分析の方法

分析の方法は、Flick (1994) のテーマ的コード化¹²⁾の手法を参考にした。分析では、実習指導者と教員の連携の捉え方を明らかにし、今後の連携のあり方を具体的に示すことを目的に、インタビュー内容の中から連携に関する発言に着目した。分析の手順は以下のとおりである。①データの記録化として、ICレコーダーで録音した内容を文章化した。②個別分析として、データの記録から連携についての語りに対して、意味内容ごとにコード化を行った。③カテゴリー化として、個別のコードを重ね合わせながら、サブ・カテゴリーを作成した。④分析テーマの作成として、サブ・カテゴリーと個別データを繰り返し検討し、分析テーマをカテゴリー化した。⑤分析として、分析テーマを用いて、サブ・カテゴリーをグループごとにテーマ的コード化をした。⑥グループ間の関連分析として、類似点や相違点、影響を及ぼす要因について分析した。

3. 倫理的配慮

インタビューは、協力者が回答しやすいように、協力者が指定する場所で行った。インタビュー前に、インタビューの目的、回答したくないことには回答しなくてもよいこと、匿名性の保護、秘密保持について説明し、同意書の記入を依頼した。また、収集したデータは研究以外には使用しないことを説明し誓約書を手渡した。

Ⅲ. 結 果

実習指導者と教員のそれぞれに対して、実習指導者は21の、教員は20のサブ・カテゴリーを作成した。それらを連携が図れていると感じている要素と連携が図れていないと感じている要素の2つを分析の視点として分類した。その結果、それぞれ7つのカテゴリーに振り分けられた(表3～6)。なお、インタビューの引用については、協力者の言葉を生かすため、できる限り忠実に掲載した。語りが長い場合には、中途の省略を行った。

表3 連携が図れていると実習指導者が感じている要素

a) 実習開始までの情報の共有

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
学生の個人情報	「学生の情報については先入観をもってしまふなどのデメリットもあるかもしれないので何とも言えないが、事前に情報があるとありがたい面もある」(1)「学生の情報を最初に教えてもらった方が指導しやすい。最後に教わっても実践には役に立たない。最後の方で、『実は…』と言ってこられることもある」(5)「個人情報と言われればそれまでであるが、何か問題があるのであれば、せめて実習指導者にだけは伝えてもらいたいと思う」(10)
学生のパーソナリティや課題	「再実習を依頼される場合、A校は再実習の学生を依頼するときはしっかりと学生のことを説明し(略)実習の契約をするその間、先生も熱心に巡回し学生をサポートしている」(5)
養成校の思い	「打ち合わせ会は法の改正の説明が多いが、どういふので悩んでいるのかということを書いてもらえると、対応の方法もわかってくるのでそういったものがあればよい」(9)

b) 実習中の情報の共有

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
問題があればメールや電話で情報交換	「実習中は何か問題があれば電話で連絡したりしています」(1)「気になることや巡回前に知っておいてほしいことは、事前に電話やファックスで伝えていきます」(3)(4)(10)「電話やメールで連絡を取るようになっている。情報交換が必要な学生が増えてきた気がする」(10)「受け入れている学校も少なくなってきたが、先生方が熱心で、何かあればすぐに話が出来る関係が出来ている」(13)「何か問題があれば連絡してくださいと言われている」(15)
巡回時の情報交換	「巡回前や巡回後に教員と話をすることもあります。このことにより十分に情報の共有は図れていると思います」(4)「教員との情報交換は巡回に来た時に一緒に歩きながら、実習生の様子を話したりする」(5)「巡回に立ち会えなくても、先生とその後少し話したりできる」(8)
指導内容の共有	「巡回で、どういうことを話しているのかということを書いておきたいという現場の声があった」(9)「巡回では教員の考えがわかるし、これからの実習指導の方向が見えてくるため参加したほうが指導しやすい」(10)

c) 養成校との関係の形成

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
教員との個人的関係	「先生から連絡を入れてくれているし、面識もあるため取れている」(2)「各学校の担当の先生とは、仲良くしている」(6)
教員との関係性の形成	「実習の打ち合わせ会には先生の顔を見に行くだけでいいのではないかな。学校がどういうことを学ばせてほしいと思っているのかということや熱意を伝えて下さればそれでいい(略)顔を見ることが一番」(2)「担当の先生ともっと話をできる場を増やしたらいいと思う」(6)「実習打ち合わせ会への参加や、巡回への参加など、教員と顔見知りになることで意見交換がしやすくなると思う」(10)
相互の理解	「(打ち合わせ会や報告会では)どこの学校も愚痴を言い合うというか、お互いの意見をいうだけで学生を育てるためにどうすればいいのか具体的に腹を割って話す機会が少ないのでは。その為にはコミュニケーションが必要であるし、お互いのことを知らなければいけないのではないかな」(11)
困難学生の受け入れ	「困った学生がいるからお願いしたいと言われることもあるので連携がとれていると思う」(6)

d) 実習教育に対する意識

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
学生の課題達成のための協働	「学校と施設と一緒に学生を育てていくという姿勢でお願いしたい」(4)「学校と一緒にやっているような関わりが大切。日頃からの関わりが持てているところはうまくやれている」(14)「職員には常々言っていますが、生かすも殺すも実習次第であるとも思います。互いの役割・領分を大事に尊重し学生を育てることが出来ればと考えております」(14)
実習施設職員の成長	「学生が成長する時間を職員が共有できることは職員教育においても必要だと考えています」(15)

表4 連携が図れていないと実習指導者が感じている要素

e) 養成校による違い

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
教育方法	「記録についてはどこまで指導をしてよいのか戸惑うこともある(略)学校によって違いがあるので」(1)「学校によって計画を立てるにしても微妙に違う、進め方が…学校間でも書式が違う」(7)「1段階で達成すべき目標や、実習の内容を具体的に示してほしい」(8)
評価基準が不明確	「あまり先生も巡回に来ず、学生も熱心さが足りない感じだったので、それに見合った評価をつけると単位認定が出来ないから評価しなしてくれと学校からクレームが来た(略)それなら最初から説明してくれたらよかったのになと思う」(5)「学校によって評価の仕方がバラバラである。“ふつう”がなく“できた”“できない”の極端になっているケースもあり、どこにつけていいのかわからない」(9)「評価や再実習の基準も示してほしい、施設にお任せしますでは困る」(11)「『落として下さい』という学校もあれば、『ぎりぎりでも通して下さい』という学校もあります。どちらが学生のためになるのかはわかりませんが、先生方は逃げないでいただきたい」(14)

学生のレベル	「学校による特徴というといいが、施設側からみると特徴というより、学校によって力量というかレベルに差がある。実習期間や大学、短大など、どうしても時期の問題もあると思うがその差が大きすぎる。どのレベルに合わせればいいのかなどはわかりにくい」(11)
--------	--

f) 教員に対する不信感

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
学生を把握できていない	「最近の学生は心に問題を抱えた人が多いように思います。(略)学校側が把握しているのかどうかさえ疑問なこともありますので、学生をよく見ていただきたい」(4)「学生のことをどれだけ学校が把握しているのかは疑問である。介護福祉士としての適性や資質について見極めてもらいたい」(10)「巡回教員の方が十分学生を理解していない場合もあります。学生の意見としても出ている」(15)
施設への不理解	「教員によっては学生を育てたい思いは理解できるが、施設への協力という点での意識が薄い人もいます。たとえば施設批判や現場をわかっていない人…。最近そういう人も減っているが、そういう人とはやりにくい」(11)
巡回に対する姿勢	「学校で決められているので、週何回来なければいけないといった感じでこれらしている先生もいる」(12)「こちらが指導していても、褒めちぎる先生がいる。結果、学生が天狗になり手をつけられなくなることも。巡回指導としての意味合いを履き違えている教員の方もおられるように思います」(14)
教員間の連携不足	「巡回に来られる先生が毎回違った。こちらも初対面の先生にどの程度までお話ししていいのか迷う」(8)「同じ学校でも複数の教員が来ることがある。そうなった場合、すべて教員同士情報を共有されているわけでもなく、うまく伝わらない時がある。最初に連絡された先生と巡回の時の先生とが違う時に伝わっていない時がある」(9)

g) 職場内の環境

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
実習受け入れに対して否定的	「実習生に対して、担当にあたっていなくても否定的な職員もいる」(1)「カンファレンスはどうしても時間がかかる。そうなると時間外にすることが多い。時間内には他の職員の目が気になる」(1)「途中で資格を取った人は実習生に対してマイナス的なイメージをもっていて、実習生が来ると業務が遅れるとか、手とられるとかマイナスとして考えたるする」(11)
養成教育への不理解	「他業種や養成校出身者以外の職員には、実習(段階)ごとの到達目標がわかりにくい」(3)

表5 連携が図れていると教員が感じている要素

a) 実習開始までの情報共有

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
教育方針の理解	「卒業生が実習指導者になると、学校でどのような教育を行っているのかわかる。自分の経験も踏まえて指導してくれると学校としては安心できる」(6)「学校も施設に対してもっと教育内容を明らかにしなければならないし、施設も実習内容について学校に明らかにしていかなければならない。実習の組み立てについて、もっとすりを合わせしなければならない。そこが連携」(6)「施設に対して学生の学びたいことをきちんと伝えて組み立ててもらえることをやっていて、それを施設も受け入れてくれている」(7)「施設が養成校に歩み寄りをしてくれ、学校のやり方とか方針について目を向けてくれている(略)施設も養成校とできるだけ連携をとってこういう感じが出てきた」(8)
学生の個人情報	「学生の実習先を事前に振り分けをした時、問題であろうというような学生については、事前に施設に個人票をもっていった段階で綿密に打ち合わせを行っている」(5)「施設の方とは学生に対してどのように関わった方がいいのかといった調整を行う」(6)「学生の事前情報を提供することにより、実習中に配慮していただけ、その学生にとって良い実習になったという例がある」(12)
教員の訪問による打ち合わせ	「オリエンテーションの前に教員が打ち合わせに行く」(3)「個人票は教員が持って行くようにしている」(5)「指導者と教員との関係作りという意味でも教員に事前訪問は大きな意味があると思う」(12)「教員が実習開始1ヵ月前に施設を訪問し、実習指導者との実習打ち合わせ会を行う。教員から伝える主な事柄は、実習の到達目標、学校での授業の進捗状況、学生の状況等である」(13)

b) 学生の実習課題達成に向けての協働

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
指導環境への信頼	「連携の取れている施設には大変な学生を送ることがある。その場合、どちらも連絡を綿密にとれるようにしている」(3)「実習施設を選ぶ時も、気になる学生については、手厚い指導をしてくださる施設にお願いをする。手のかかる学生については、コミュニケーションの出来ている施設にお願いをする」(8)
学生の目標や能力に応じた指導	「引っ込み思案で実習が継続できなかった学生に(略)ボランティアとして施設が受け入れてくれた」(3)「コミュニケーションや書く力がない学生に対して、補習実習をした。学校に戻り日誌を書く。施設も学生に対し、せめて入浴介護で自信が持てるようにしましょうということで、毎日入浴に入れてもらい、双方のフォローで学生が自信を持て成長した」(11)
実習における学生の課題の理解	「教員と施設の職員が課題を共有しながら学生の指導に当たる。指導の内容についても配慮をお願いする。施設の方と学生の実習について、話をして調整が出来ているというところで考えると連携が出来ていると考えてよい」(6)「(お願いした指導を)段階を経て学びとれているのだろうかということを指導者の方と細かくやりとりすることがいい関係につながっているし、いい指導につながっている」(7)
学生の課題達成のための協働	「学校の教員と施設の指導者の役割を明確にしていく必要性」(2)「施設と養成校はもっと協力していかないといけない。自分たちもお願いばかりではなく、施設の想いとかを聞くなかでそれを学生の指導に生かしていく」(7)

c) 実習施設との関係の形成

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
巡回施設の固定	「実習施設を担当する指導教員はだいたい決まっています、変更になったら事前にあいさつに行く（略）同じ教員が回る方が関係性が出来ていてよい。施設側も変わらないでくれという」（9）「連携が図れていると感じるのはずっと自分が担当しているところ。何かあったら話してくれるだろうという気持ちや、学校行事の時には必ず来てくれる」（10）
委託関係が長い	「付き合いが長いので施設も学校や実習のことについて十分理解してくれている。わざわざ話をする場面を作る必要もない」（9）「施設とのつながりが長い（略）結構気心が知れていて言いやすい」（15）
指導者との関係性	「細かなところまでメールで連絡をもらえたりするので状況がわかりやすい。ただ、教員と職員の個人的なつながりの大きさが影響している部分も大きいので、それで施設間に格差が出るようではいけないと思う」（2）「実習施設に卒業生が多いので、卒業生に直接話を聞くことができ、忌憚のない意見をもらうことが出来る」（5）「同じところにずっと行っていれば顔なじみにもなり、お互いが言いやすくなる。指導者とこちらの関係作りがうまくいっているところでは、連携が図りやすい。そうでないところはなかなか…」（12）

表6 連携が図れていないと教員が感じている要素

d) 介護実習に対する理解不足

カテゴリー	コード／インタビューの引用
実習に対する意識	「力量以上に実習に対するとらえ方の違いが大きい」（2）「実習生をどう受け止めてくれているのかに差が出ているのではないかな。学生を邪魔としか見てくれない職員は学生をあまり見てくれていないのではないかな」（3）「指導内容については指導者によりずいぶん差がある。学生の資質にもよるが、指導者に指導するという意識のあるところとそうでないところがある」（9）
養成教育への理解	「施設が、介護福祉士養成教育の制度について理解していない」（10）
教育内容の理解	「実習に送り出す時に大学側の準備が大切であるとともに、それに沿ってもらいたいし、それが出来ないものには言ってもらいたい。そうやって修正してもらいながら行うことが連携ではないか」（4）「教育内容をしっかりわかって指導をしてきている施設と、そうでない施設が2分化している」（5）「学校の教育内容を理解したうえで、施設での実習にうまくリンクして行われることを連携というならばそこは出来ていない」（6）「介護過程の指導については施設間格差がある（略）最近養成校を出た人の方がよくわかっている。卒業生が指導者になっているところは、すーっといく」（9）
実習の目的の共有	「連絡はとれているが連携は図れていない。それは、目的が共有できていないから」（4）「学生を細かく見て、教育的配慮をこちらの思っているように見てくれる施設と介護目指して頑張っているところだけを見る施設と2極化している」（5）

e) 実習担当者との情報交換不足

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
先入観への懸念	「学生の気になる情報については、施設に先入観を与えるのですようにしてないが、身体的配慮が必要な学生については伝えるようにしている」(8)「個人票をもとに、相手にマイナスの先入観を与えないように配慮しながら、情報を提供する」(9)「特記事項のある学生に関しては、事前に伝えることもあるが、言わない方がいい場合もあるので、コミュニケーション能力が極度に悪い子に関しては伝えるが、そうでない場合はあまり言わない」(11)
タイムリーな情報が欲しい	「何かあれば連絡をくださる施設と、カンファレンスに行って初めて問題点を指摘される施設がある」(2)「急に実習中止を言い渡されたケースもあり、事前に情報が欲しかったなと思うこともある」(12)「実習が終わってから、成績が付けられないようなことを言われたり、ここが出来ていないと言われることもある。」(15)
実習指導者と顔を合わせることが出来ない	「情報交換を行いやすいと早めに修正もできるので、できるだけ顔を合わせる事が大切だと思うが、現場の方が担当してくださっているとなかなかお会いできないこともあり、難しいなと思うことがある」(2)「担当者とのシフトが合わない。巡回に行ってもいつもいないということが多い(略)その場合には具体的な話を聞くことが出来ない」(3)「最近どの施設も忙しいようで、なかなかお話しする時間がとれない様子。カンファレンスの時間も短縮して欲しいと要望されることもあり、もっとじっくり連携を図らなければならないと感じている」(13)「あえて巡回を避けているのではと思うこともある。カンファレンスでも、ちゃんと実習を見てくれないと感じることもある」(15)

f) 実習施設の指導内容

サブカテゴリー	コード／インタビューの引用
現場の力量	「指導者が実習に対して積極的でいい実習指導をしていても、現場にまでそれが浸透していないこともある」(2)
実習指導者の力量	「非常によく出来ている指導者のおられるところとそうでないところでは、学生の指導に大きな差が出てくる。非常によく出来た指導者のところに行けば、学生は非常に勉強になる。そうでないところに行けば好きなようにやってといった形になる」(5)「学生にきつく当たる指導者がいて話をすると、忙しい中でなぜ自分が実習担当なのかという施設に対する不満をもっていた」(10)「実習指導者にちゃんとして欲しい。実習生を頭数にしないほしい。これが出来ているところは、学生指導もちゃんとしている」(11)
学生の個別指導	「学生個人を見てもらって指導して欲しいと思う(略)みんな一緒にくくられて」(3)「連携が図れていないと思う施設は学生に対しても形式的に関わる。遠慮もある」(10)「学生の特徴をわかって指導して下さるところとそうでないところ。学生をつぶさないような指導をしてくれるところと見極めることも大切」(12)

g) 養成校教員間の連携不足

カテゴリー	コード／インタビューの引用
教員間での情報共有	「学校側の指導体制についても、(施設指導者の意見を)聴く必要がある。たとえば、先生によって指導方法が違ってくる話も出てくる」(4)「専任教員と非常勤教員がいて、一緒に実習指導しているということで教員の中にも温度差がある」(14)

1 実習指導者からみた連携

実習指導者が、連携が図れていると感じている要素として、(a) 実習開始までの情報の共有 (b) 実習中の情報の共有 (c) 養成校との関係の形成 (d) 実習教育に対する意識があげられた。また、連携が図れていないと感じている要素として (e) 養成校による違い (f) 教員に対する不信感 (g) 職場内の環境があげられた。

以下、実習指導者を1、教員を2とし、それぞれに対して連携が図れていると考える要素と図れていないと考える要素を抽出し、カテゴリーを〈 〉で、サブ・カテゴリーを【 】で示し考察を行った。

(発言の「 1 」後の(指1)は、実習指導者1の発言を表し、(養1)は、養成校教員1を表している)

(1) 連携が図れていると考える要素

① 事前情報の共有

学生の事前情報の提供が行われているかが、連携が図れているかどうかの一つの基準とされていた。津田(2009)の調査結果でも、実習指導者が、教育的に積極的であると思う養成校と消極的であると思う養成校とでは、「授業の進行状況」「実習目標について」「実習内容についての希望」などの実習前の情報提供等に有意差が示されている¹³。

〈1-a 実習開始までの情報の共有〉としては、【学生の個人情報】【学生のパーソナリティや課題】【養成校の思い】があげられた。学生の個人情報の必要性については、山下らの調査でも「実習プログラムの作成や実習指導を行うために、学生の個人情報を必要としている¹⁴」と示されている。また、学生のパーソナリティについては〈1-b 教員に対する不信感〉の、【(教員が)学生を把握できていない】というカテゴリーにもつながる。「最近の学生は心に問題を抱えた人が多いように思います。学校側がそのことを把握しているのかどうか」(指4)といった、学生のパーソナリティへの対応について、事前に情報の提供がない＝教員が学生を理解できていないという不信感につながっている。

学生の個人情報の提供については、教員も、連携が図れていないと感じている要素として〈2-e 実習担当者との情報交換不足〉を示している。学生の個人情報については、【先入観への懸念】から、どこまでの情報を提供するかということについて迷いがあることが示唆された。

② 実習中の情報交換

実習指導者が連携が図れていると感じている要素として、インタビューの語りで多かったのは、〈1-b 実習中の情報の共有〉と〈1-c 養成校との関係性〉であった。

〈1-b 実習中の情報の共有〉は、【問題があればメールや電話で情報交換】している、【巡回時の情報交換】などが示された。しかし、「実習中は何か問題があれば電話で連絡したりしています」(指1)というように、「問題があれば」の連絡であった。また、「情報交換が必要な学生が増えてきたような気がする」(指10)という発言からも、実習指導者は、巡回やカンファレンスなどの予定以外に連絡することを連携の一つの尺度にしていること、その連絡の対象は実習を行うにあたって問題があると、実習指導者が認識した場合ということが示された。学生が

実習過程において躓きを見せた時には、巡回教員の役割が重要であることはこれまでも示されている¹⁵。しかし、実習における連携は問題なく実習を終えることだけが目的ではない。学生の実習目標の達成のための連携であるならば、問題があった学生だけでなく、すべての学生に対して実習過程において学生の学びを共有する必要がある。

また、〈1-c 養成校との関係性〉では、多くが【教員との関係性】をあげている。〈担当の先生とは仲良くしている〉（指6）、「先生から連絡をくれているし、面識もあるから取れている」（指2）といった、個人の関係が軸とされていた。また、その関係性を築くために、実習打ち合わせ会に参加をしていることも示された。

（2）連携が図れていないと感じている要素

① 養成校による違い

具体的には、【教育方法】【評価基準が不明確】【学生のレベル】が抽出された。介護福祉士の養成過程は、4年制の大学から1年制の専攻科まで多岐にわたっており、その実習の時期も実習における到達目標も異なる。いくつかの実習を受け入れている実習施設にとっては、その実習段階ごとの、また養成校ごとに作成される書類や指導方針に対応しなければならない。「記録についてはどこまで指導をしてよいのか戸惑うこともある（略）学校によっても違いがあるので」（指1）というように、指導に際して戸惑いを感じている。また、「評価や再実習の基準も示してほしい、施設にお任せしますでは困る」（指11）といった【評価基準が不明確】という点においても、実習指導者と養成校間の共通認識が出来ていないということが、連携を図れていないと考える要素となっている。

② 教員に対する不信感

先にも述べたが、〈1-a 実習開始までの情報の共有〉と関連して【学生を把握できていない】【施設への不理解】【巡回に対する姿勢】【教員間の連携不足】があげられた。「学生のことを学校が把握しているのかは疑問である」（指4・10）というように、実習における学生のパーソナリティに関する情報提供とのずれ、または情報提供の少なさが要因となっている。

実習巡回のみを担当する教員の配置や複数の教員による巡回では、【教員間の連携不足】が指摘されている。「巡回に来られる先生が毎回違った。こちらも初対面の先生にどの程度までお話ししていいのか迷う」（指8）といった戸惑いや、「最初に連絡された先生と巡回の時に先生とが違う時に（話が）伝わっていない時がある」（指9）といった不信感が生じている。連携が図れている要素として【教員との関係性】が、あげられていることから、関係性が構築されていない教員との連携が図りにくいと感じていることが示唆された。また、養成校教員からも、〈2-g 養成校教員間の連携不足〉が、施設との連携不足の要素としてあげられた。

2 養成校からみた連携

養成校においては、連携が図れていると感じている要素として、（a）実習開始までの情報の共有（b）学生の実習課題達成に向けての協働（c）実習施設との関係の形成があげられた。また、連携が図れていないと感じている要素として（d）介護実習に対する不理解（e）実習担当

者との情報交換不足 (f) 実習施設の指導内容 (g) 養成校教員間の連携不足があげられた。(以下、記述の仕方については実習指導者と同様とする)

(1) 連携が図れていると感じている要素

① 事前情報の共有

実習指導者同様に、連携が図れていると感じている要素として〈2-a 実習開始までの情報の共有〉があげられた。事前情報に関して、実習指導者が【学生の個人情報】や【学生のパーソナリティや課題】をあげているのに対し、教員は【実習における学生の課題】【教育方針の理解】等が抽出された。

「卒業生が実習指導者になると、学校でどのような教育を行っているのかがわかる」(養6)とあるように、卒業生が実習指導者であることで情報の共有が行いやすいということがあげられた。つまりは、教育内容やその方針を理解して指導をしてもらえることを連携としていることが窺える。また、【学生の個人情報】についても、「問題であろうというような学生については、事前に施設に個人票をもっていった段階で綿密に打ち合わせを行っている」(養5)、「教員が実習開始1ヵ月前に施設を訪問し、指導者との実習打ち合わせ会を行う」(養10)など、情報の共有の手段として【教員の訪問による打ち合わせ】を行っている養成校もあった。

② 学生の実習課題達成にむけての協働

実習においては、教育的な面での差が大きいと認識されていることから、「連携の取れている施設には大変な学生を送ることがある。その場合、どちらも連絡を綿密にとれるようにしている」(養3)、「実習施設を選ぶ時も、手のかかる学生については、コミュニケーションの出来ている施設にお願いする」(養8)というように、学生の実習施設の選択にあたっては、【指導環境への信頼】が大きく影響していた。同様に施設側も、連携が図れていると感じている要素に【困難学生の受け入れ】をあげていた。

また、実習においては学生の実習目標の達成とそのプロセスが重要である。そのため、「教員と施設の職員が課題を共有しながら学生の指導に当たる。指導の内容についても配慮をお願いする」(養6)、「段階を経て学びとれているのだろうかということを指導者のかたと細かくやり取りする」(養7)といった、【実習における学生の課題の理解】や、【学生の目標や能力に応じた指導】がなされていることに対して【学生の課題達成のための協働】が出来ていると認識されていた。

【学生の課題達成のための協働】においては、「学校の教員と施設の指導者の役割を明確にしていく必要性」(養2)や実習施設も「現場と施設と一緒に学生を育てているという姿勢でお願いしたい」(指4)と、それぞれの役割を明確にし、ともに協働出来ることを連携としていた。

③ 実習施設との関係の形成

実習指導者が【教員との関係性】をあげていたのと同様に、教員も〈2-c 実習施設との関係性の形成〉として、【指導者との関係性】をあげていた。関係性の形成においては、【委託期間が長い】ことにより、「付き合いが長いので施設も学校や実習のことについて十分理解してくれている」(養9)といった、【教育方針の理解】が図れていることがわかる。また、養成校は、

関係性を形成するために【巡回施設の固定】を行っていた。

しかし、「同じところはずっと行っていれば顔なじみにもなりお互いが言いやすくなる。指導者とこちらの関係作りがうまくいっているところでは、連携が図りやすい。そうでないところはなかなか…」(養12)といった関係性による影響に対して、「教員と職員の個人的なつながりの大きさが影響している部分も大きいので、それで施設間に格差が出るようなことではいけないと思う」(養2)という指摘もみられた。

(2) 連携が図れていないと感じている要素

① 介護実習に対する不理解

「教育内容をしっかりわかって指導をしてきている施設とそうでない施設が二分化している」(養5)というように、【養成教育に対する不理解】【教育内容の不理解】といった、〈2-d 介護実習に対する不理解〉が抽出された。介護実習に対する不理解は、「実習生に対して、担当にあたっていなくても否定的な職員もいる」(指1)といった〈1-g 職場内の環境〉として、実習指導者が、連携が図れていないと考える要素にもあげられている。教員からも同様に、「力量以上に実習に対するとらえ方の方が大きい」(養2)、「実習生をどう受け止めてくれているのかに差が出ているのではないか」(養3)と、【実習に対する意識】が影響していることが示された。

また、実習指導者が、連携が図れているという認識に【問題があればメールや電話で情報交換】といった連絡が出来ていることをあげているのに対し、教員は「連絡はとれているが連携は図れていない。それは、目的が共有できていないから」(養4)と単に連絡を取り合うことが連携ではなく、そこに目的の共有が必要であることを指摘している。

② 実習担当者との情報交換不足

先にも述べたが、実習担当者との情報交換が不足する要因として、【先入観への懸念】があり学生の個人情報の提供について、教員は、慎重になっていることが窺えた。また、実習中の実習指導者との情報交換は、「情報交換が行いやすいと早めに修正もできるので、出来るだけ担当者と顔を合わせる事が大切だと思うが、現場の方が担当してくださっているとなかなかお会いできないこともあり、難しいなと思うことがある」(養2)といった、【実習担当者と顔を合わせることが出来ない】といったことがあげられている。早めに修正という点では、「急に実習中止を言い渡されたケースがあり、事前に情報が欲しかったなと思うことがある」(養12)といった、【タイムリーな情報が欲しい】ということにも関連している。

また、【実習担当者の力量】は、効果的な実習や連携に大きな影響を与えている。【学生の個別指導】といった、個々の能力に合わせた指導を養成校は連携の尺度としていた。つまり、【学生の能力や目標に応じた指導】を求めているのである。しかし、「実習指導者が実習に対して積極的でいい実習指導をしていても、現場にまで浸透していないこともある」といった〈2-f 実習施設の指導内容〉が実習に影響していることも示された。

Ⅳ. 考察

以上、これまで実習指導者と教員、それぞれの連携が図れていると考える要素と連携が図れていないと考える要素について、整理してきた。結果については、実習指導者・教員、それぞれの立場やそれぞれの関係性によって、回答に特色は見られるものの、全体を概観し実習指導者と教員の連携の捉え方について考察を行う。

1 実習における到達目標の相違

実習指導者にとっては、「問題なく実習を終えること」が一つの到達目標であることがインタビューの分析から窺えた。つまり、「何か問題があれば連絡をする」ということを、実習指導者は連携が図れているとしているのである。一方、教員は学生の実習課題の達成を到達目標にしている。そのため、連携が図れていると考える要素としては、単に「問題なく実習を終えること」ではなく、学生が立てた課題を達成するための協働が図れることにある。それは、教員が、連携が図れていると考える要素として、教育方針への理解や実習における学生の課題の理解、学生の目標や能力に応じた指導など、実習施設の指導内容に対するものが多く示されていることから明らかである。

辻・小林（2008）は、介護実習施設における実習生の受け入れ体制の現状と課題を分析し、実習指導者の視点から「明確な目標に向かい指導を行うことが、施設に求められている役割であることを再認識しなければならない」と述べている¹⁶。実習は学生が学内での学びをさらに発展させ、専門職者としての価値を築いていくための場であり、そのための目標を学生自身、実習施設、養成校が共有しなければならない。実習施設が教育的機能を担っていることを再認識し、単なる「連絡」の域を超えて、協働のための情報の共有を図ることが求められるのである。

2 事前情報の共有

事前情報の共有については、「介護福祉士養成教育への理解」と「各養成校の教育目標」、「学生の個人情報」などがあげられていた。「学生の個人情報」では、実習指導者は指導上の配慮として、学生のパーソナリティについての情報提供を希望しているが、教員は、「個人情報の保護」や「先入観への懸念」から、情報提供について慎重になっており、両者にずれが生じていることが明らかになった。

実習指導者・教員ともに、連携が図れていると認識している要因として、両者の関係性をあげている。委託期間が長くなることや、教員の実習巡回施設を固定し関係性を深めることで、お互いの考え方や目標など意志疎通を図る機会が多く持てることから、実習に関する相互の考え方を理解することにつながることを推察できる。

しかし、連携を図れていると考えている実習指導者とはコミュニケーションも図りやすく、学生の課題達成に向けての協働が行われているが、関係性がうまく構築されていないところとは連携が図りにくいというのであれば、ますます連携が図れている施設と図れていない施設の

二極化が進むことが考えられる。

それを解消するためには、養成校側から、実習施設に対しての積極的な働き掛けが必要であると考えられる。実習に対しての情報共有の場として、養成施設は実習打ち合わせ会等を開催しているが、実習打ち合わせ会に参加している施設も限られている。また、連携が図れていない施設ほど参加が出来ていないとも考えられる¹⁷⁾。たとえば、打ち合わせ会等に参加できない施設に対しては、教員が事前に施設を訪問し打ち合わせを行うといった、養成校側からのアプローチが必要であろう。

また、教員側の施設への不理解も指摘されている。波多野（2008）は、「この施設の実習の現場の状況やその指導方針などをわかってきているから、安心して学生を受け入れられる¹⁸⁾」と、養成校が実習施設に信頼してもらうことも大切であり、そのための連携を図る努力を行ってはいないと述べている。養成校側にも養成教育を理解してもらうだけでなく、実習施設を理解することが求められるのである。

V. おわりに

今回の調査結果から、実習指導者と教員のそれぞれが、連携が図れていると感じている要素と図れていないと感じている要素が示された。また、その結果から、実習指導者と教員の連携の捉え方の相違点が明らかになった。

第1に実習指導者は、「問題があれば連絡出来る関係」を、連携が図れていると捉えており、教員は目標達成のための情報の共有を求めており、「連絡と連携は違う」と認識している点である。第2に、実習指導者は、学生の指導においてパーソナリティを含む学生の個人情報事前に知っておきたいと考えているのに対し、教員は実習指導における先入観を懸念して、学生のパーソナリティに関する情報の提供に慎重になっているという点である。

今後、これらの相違点の解決に向けては、実習プログラムが効果的に作成されることが期待される。学生の実習目標の達成に向けて作成されたプログラムをもとに、学生・実習指導者・教員が、その到達度についての情報を共有することが望まれる。学生自身が、日々の目標が達成できたかを振り返り、時には目標を修正しながらも、実習課題の達成に向けて、実習を進めていくための指標が実習プログラムである。

実習施設において、効果的なプログラムを作成するためには、事前オリエンテーションにおける学生の実習目標やこれまでの学びの確認が重要であることは言うまでもない。更に、効果的なプログラムの作成に向けて、養成校が実習施設を理解すること、養成校が期待する到達目標や教育方針、学生のパーソナリティなどの情報を実習施設と共有することが求められる。そのためには、実習前に教員が実習施設を訪問し打ち合わせを行うなどの個別の打ち合わせを行うことも必要であろう。

介護実習においては、カリキュラムの改正に伴い教員の巡回指導が1週間に1回に緩和され、実習施設との連携は、より密に求められている。

今後は、実習プログラムを効果的に作成するための具体策について引き続き研究を重ねていきたい。

謝辞

調査の実施にあたり、調査に協力いただいた実習指導者・養成校教員の皆さまに深く感謝し心からお礼申し上げます。

本論文は、平成20年度の日本介護福祉学会の研究助成を受けた「介護実習施設における実習受け入れ体制の現状と課題について—双方の人材育成の視点から—」で得たデータを基に、新たに検討を加えたものである。

〔注〕

- 1 「介護実習施設における実習生受け入れ体制の現状と課題について—双方の人材育成の視点から—報告書」、京都介護福祉研究会。
- 2 「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」、平成19年厚生労働省告示第289号。
- 3 津田理恵子「実習を受け入れる施設の現状と課題—養成校教員と施設指導者の調査結果から—」『介護福祉教育』、第13巻第2号、2008、18-25。
- 4 山下恵子 尾台安子、「介護福祉実習に対する実習施設側の意識と課題」、『松本短期大学紀要』、第14号、2005、105-111。
- 5 宇野幸恵・鹿野幸恵・橋本佳子、「介護学生の学習意欲をそこなわせる要因及び最後まで実習を継続させる要因について」、『佐野短期大学研究紀要』、第17号、2006、129-144。
- 6 畠山千春・戸澤由美恵・弓貞子、「介護実習指導のあり方を探る—実習施設指導者からのアンケート結果を踏まえて—」、『共栄学園短期大学研究紀要』、第20号、2004、111-137。
- 7 津田理恵子、「介護福祉実習における養成校の課題—養成校教員と施設指導者の実習に関する調査結果から—」、『厚生指標』、第56巻5号、2009、10-16。
- 8 辻智典・小林大介、「介護実習施設における実習生の受け入れ体制の現状と課題—実習指導者の視点から—」、『介護福祉士』、第13号、2009、29-35。
- 9 前掲1。
- 10 前掲1、7。
- 11 前掲1。
- 12 小田博志・山本則子、『質的研究入門—（人間科学）のための方法論』、春秋社、2002。
- 13 前掲3。
- 14 前掲4。
- 15 前掲5。
- 16 前掲8。
- 17 前掲8。
- 18 波多野大介（2008）「実習指導教員の責務—実習支援マネジメントの視点から—」『介護福祉教育』、第14巻第1号、83-88。